

「式部先生に聞く」

編集部

学部創設当時は「何をやっているのかわからん学部だ」とか「悩めるパイオニア」などと世間に言われつつ、総合科学部もなんとか6年目にこぎつきました。しかしながら、学部の伝統はおろか、学部としての Identity もまだ確立していないとさえ言われる総合科学部において、過去5年間の歩みはどういう意味をもち、どのように学部を変えてきたのでしょうか。そして今後の総合科学部のあり方、方向性はいかにあるべきなのか、学生はこれにどう関わっていけるのかなど未だ模索しているのが現状ではないかと思われます。

今年度「飛翔」では、上のテーマについていろいろな声を集めていきたいと考えています。「飛翔」学生編集部ではその第一弾として去る5月23日(水)に、式部学部長とのインタビューをもちました。以下はその内容をまとめたものです。

▷総合科学部の創設の理念と構想とは？

戦後の新制大学は、一般教育と専門教育から成り立っているわけだが、10年前の大学紛争を経て教養部における教育のあり方が問われ、その改革の必要性が論議されるようになった。それまでの日本の大学は、アメリカの大学教育を輸入して、四年間の前半は教養、後半は専門といった教育システムであったが、いわば圧縮された形での教育であるために学部教育が十分に機能していないという反省が出された。

その結果、一般教育と専門教育を融合した新しい形の学部教育をしていく学部として、総合科学部が構想された。それと、従来の学部の学科・講座というものが学問分野、制度的にも狭く、また学生もその中でのみ学習している感があるわけだが、もっと総合的な視野をもって主たる専門領域に加えて副専攻的な領域についても関心をもって学習してもらいたいということから、幅の広い専門領域をもった学部の方向が打ち出された。それと同時に、その基礎になるものとして、異なった領域、分野の先生方に共同して学際的な研究をしていただき、より高度な学問成果をおさめてもらおうというものである。

ただ、学生の関心だけで授業を自由に受けていくとなると、安きに流れてしまうおそれがあり、効果的に学生の力を伸していくには、ある程度の履習要求が必要であると思われる。そこでその方向づけとして四コースを設け、それぞれの標準的なカリキュラムをこなすことによって学生の力を伸ばせるようなシステムになった。

▷6年目を迎えての理想と現実のギャップは？

新設学部においては、種々の問題が出てくるのは当然のことであるが、まず一般教育と専門教育の科目の区分を撤廃して一貫性のある学部教育を行ないたいと考えていたが、どうしても「大学設置基準」という制度上の区分があるため、意図したところが十分に実現していない。

第2に学際的研究、教育を行なう場合の有効な手順、方法が学生、教官にとっても安定的にとらえられていないこと。

第3には各コースに進む学生人員にアンバランスが生じる事である。

以上あげたなかで、第2、第3の問題は総合科学部のような学部にとって常につきまとう問題であろう。人員や学科・講座を小さくコマ切れにした形にすれば、学部の制度としては安定するかもしれないが、それでは従来の専門領域の学部教育にとどまってしまうのではないかと思う。

▷入学時にコース別に募集しない理由は？

入学時から自分の専門を決めることで、ほかの学問分野への関心をなくしてしまわないで、いろいろな面について生きた関心をもって試みたり追求したりすることができるようにということにつける。つまり、大学に入ってから、自分のやりたいことは何かという問題意識をもちつづけて、ぼんやりと一年間を過ごすことなく、自分なりに見通しをもってコースの選択を行なってほしいということである。だが、先にも触れたが、その結果現実にコースによって学生数の偏りができていることが今後に残された課題である。基本的には学生の希望を重視したいのだがそれを受け入れる側の体制を考えると、現在

は調整せざるをえなくなっている。来年からは、コース決定の前の段階でもっと各コースの情報を提供して、学生の判断材料としてもらい、偏りを少しでもなくす方向にしたい。

▷学際教育、研究とは具体的にはどういうものか？

総合科学部では、学生には2つ以上の学問領域にわたって学んでいってもらいたいし、また先生方においても自分の専門にこだわらず、その近接する関連領域の先生と協力して研究を深めてもらいたいと思っている。たとえば安楽死などの問題をめぐって医学と倫理学の立場から「医の倫理」が検討されているようにである。

総合科学部においては、各コース内、群・講座内での学際研究というものが、まず考えられるであろう。また、実社会的な問題に対して教官、学生が取り組んでいくことも可能であるし、実際そのような試みがなされつつあると思う。考え方としては、定式化された学際教育、研究というものがあるのではなく、それは教官や学生による学習会、研究会の積み重ねや、個々人の問題意識や努力によって作り出されるべきものではないだろうか。

▷コースの人員と一般教育の関連性は？

一般教養課程を受けもつ総合科学部としては、一般教育を十分に行なうに足る教官組織をもつ必要があり、その教官組織に見合った形で各コースの学生人員が規定されていることも事実である。

総合科学部は、一般教育を受けもちながら学部教育を行なおうとするのだから、欲張った学部と言えるかもしれないが、一般教育をよく行なうための条

件としては、(1)教育熱心な教官の存在、(2)学問的レベルの高い教官の存在、(3)教官自身の関心の広さが挙げられると思うが、これは学部において学際教育を行なう場合にもあてはまる要素ではないだろうか。もちろん、これによって先生方の仕事の分量は、かなりふえることになると思う。

▷学生に望むものは？

どういう学問をやるにしても、学生個々の「力」を伸すことがまず望まれるのだから、他学部に比べて履習上の規定が緩やかな総合科学部ではあるが、その中で学生自身が、自分の目的意識に沿って自己訓練を行なってほしいということである。また、学生が大学生生活の中で受ける影響で最も大きいものは学生集団での切磋琢磨ではないかと思う。仲間同志が刺激し合ってヤル気をおこしてくれることが望ましいだろう。この学部を出れば自動的に総合的視野が身につくといった簡単なものではないのだから、そのヤル気によって、用意されているカリキュラムを十分活用して自分自身の力を養ってほしいし、そうすることで今後の総合科学部を活力のある楽しいものにするよう努力してもらいたい。

以上が、学部長との約1時間半にわたるインタビューの概要です。前にも書きましたが、今後も「飛翔」ではこうした企画を続けていきたいと考えております。学生の皆さんの内でこの企画についての案、意見がありましたら最寄りの編集委員まで連絡して下さい。

「じゃがいも畑は今……………」

—— 総科生アンケート ——

編集 部

◎「総科とは何か？」を考える第1回アンケート結果報告！

先日おこなったアンケートの集計ができましたのでここに報告します。今回のアンケートは回収状況がおもわしくなく、合計で141名の解答しか得られませんでした。そのため、総科生全体の意見の収集とまではいきませんでした。総科生の中に、こんな考えを持った人がいるんだなあ、ということを知

ってもらい、総科のかかえる種々の問題について考えてもらえればと思います。又、今回のアンケートは「あまりに学生の意識に期待しすぎている」「こういうことを考えるのに必要な資料を提供するのが「飛翔」の役目ではないのか」という批判の声もありました。確かに、今回のアンケートは、何の資料も与えないままに、いきなり本質をついた質問をだしたところに問題はあったと思います。しかし、こ

の結果をふまえた上で、さらに先生方にもいろいろ質問をしていこうと考えています。

「飛翔」では、今年一年この企画を継続させていく方針です。皆さん方のほうでも、この企画について要望があれば、どしどし出して下さい。

なお、回収状況は以下の通りです。

	1年	2年	3年	4年	合計
男	32	21	34	1	88
女	29	15	7	2	53
計	61	36	41	3	141

〔1〕(全員に)あなたは何故、総科に来たのですか？

- A. 新設学部で自分の可能性を試したいから。
- B. 学際的、総合的研究をしたいから。
- C. 専攻までに(コース決定までに)1年間猶予があるから。
- D. その他

- A. 30人
- B. 64人
- C. 22人
- D. 自分の方向性との一致

「環境問題、情報関係(コンピューター)、語学、国際関係などをやりたいから」

入試に際して

「難易度(偏差値)を考えて」

「大学が近い」

「文→理、理→文の転向可能」

なんとなく

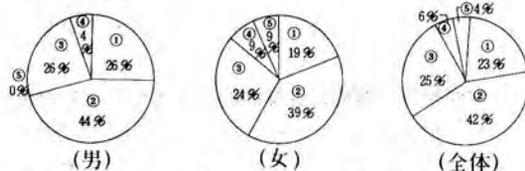
「他人とちがうことがしてみたい」

この質問はズバリ、総科に来た理由をきいているわけだが、ごらんのようにBとした人が多かった。このことは総合科学という学問を求めて入ってきた人が多いことを示しており、非常に喜ばしい現象であろう。

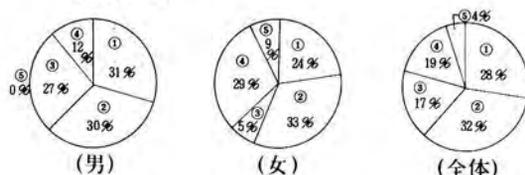
〔2〕あなたは、次に掲げる5つの問題について総科に、どの程度期待していますか。

- ①非常に期待している。
- ②期待している。
- ③ふつう(いずれとも言えない)。
- ④あまり期待していない。
- ⑤全然期待していない。

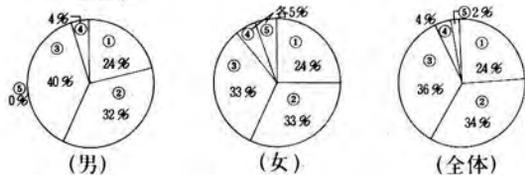
(A) 自分の専攻したい学問分野が用意されていること。



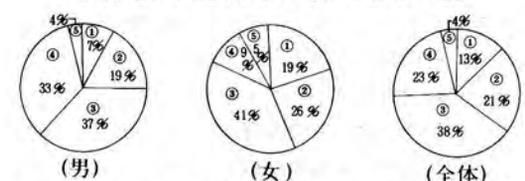
(B) 教育内容が総合的で幅広い人間形成が可能であること。



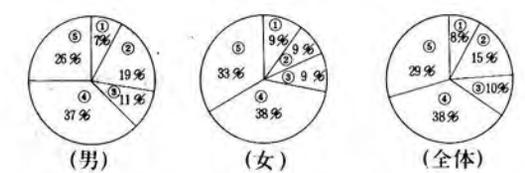
(C) 学際領域など、新鮮な内容を持つ学部であること。



(D) 入学後学部の内容がわかったのちに、専攻する学問分野を決めることができること。



(E) 自分の希望する進路(就職、進学、etc)に有利であること。



以上、5つの問題に対しての期待度を調査したわけだが、みてわかるように、A.B.Cの期待度が高いわりに、Eの期待度が非常に低いという結果になった。これは、就職や進学のための学部ではなく、真に学ぶことのできる学部としての総合科学部を期待しているように思われ、学際的、総合的研究を開拓し推進すると共に、幅広い視野を身につけるといった学部のねらいと照らしあわせてみると、非常に好ましい結果のようだ。しかしながら、A.B.Cの問題に対し、全然期待していないと答えた者が男子には